



左より鞍谷編集委員長、村田健一氏、高嶋猛先生

～伝統木造建築を未来に繋ぐ～

村田 健一 氏 (建築学科 S52 年卒業)

はじめに

“プロジェクトX 福井大学版”は、「母校の卒業生の中に、偉大な仕事を成し遂げた人がいることを知り、母校に誇りと自信を持っていただきたい。特に若い卒業生に元気の出る話、心に勇気と感動を与える話を残したい」という願いから、2003年(平成15年)発行の工業会誌第54号よりスタートしました。

今回は、前文化庁文化財部参事官の村田健一氏にご登場いただきました。ご推薦者は、研究分野が近い本学工学部建築建設工学科の高嶋猛先生(昭和48年卒業)です。

村田氏は、昭和52年3月に福井大学工学部建築学科を卒業され、東京工業大学大学院修了後、文化財建造物保存技術協会を経て、昭和59年11月に文化庁の文部技官になられました。平成27年3月に文化庁を定年退官されるまで、文化庁一筋で過ごされ、日本を代表する多数の文化財建造物の修理・復原をご担当されました。中でも、奈良国立文化財研究所での平城京大極殿復原事業は、特筆すべきお仕事と思います。他にも参事官として、姫路城大天守保存修理事業や富岡製糸場の重要文化財から国宝への格上げも成し遂げられました。文化庁をご退職後は、福井県文化財調査特別顧問として、丸岡城天守を重要文化財から国宝に格上げすることにご尽力いただいております。村田氏からお話をお伺いし、恥ずかしながら、重要文化財指定はお城全体ではなく、天守・門・櫓・塀などの建造物ごと(丸岡城は天守だけです)であることを始めて知りました。

村田氏の記事をお読みになれば、文化財建造物の修理・復原の本質が見えると思います。楽しみにお読みください。

なお、村田氏は2006年に著書「伝統木造建築を読み解く」を出版されておられます。その中には、本記事では書ききれなかった世界に誇れる日本の伝統木造建築の特質、先人の知恵や苦勞などが述べられています。

(第67号編集委員長 鞍谷 文保(機械工学専攻教授 機械工学科S55年卒業))

村田健一 氏の主な略歴

昭和30年	2月12日	福井市(当時、足羽郡美山村)生まれ
昭和48年	3月	福井県立高志高校理数科 卒業
昭和52年	3月	福井大学工学部建築学科 卒業
昭和54年	3月	東京工業大学大学院修士課程 修了
	4月	(財)文化財建造物保存技術協会技術職員
昭和59年	11月	文化庁文化財保護部建造物課 文部技官
平成6年	10月	奈良国立文化財研究所建造物研究室 主任研究官
平成14年	4月	文化庁文化財部建造物課 主任文化財調査官
平成23年	4月	文化庁文化財部参事官(建造物担当)
		東京工業大学大学院 連携教授
平成27年	3月	文化庁 定年退官
	5月	福井県文化財調査特別顧問

典型的な理系人間 ～とにかく数学、理科が大好き

昭和44年に高志高校に理数科が創設されるが、昭和45年迷うことなく第二期生として入学する。中でも数学が大好きで、特に幾何学や証明問題を毎日毎日解くことに明け暮れた。また真空管ラジオの組み立て等にも興味を持ち、高校近くの電器部品店によく立ち寄った。

一方国語、古文、英語や歴史などの文系の学科はまったく興味がなかったし、勉強しなかった。高校時代はとにかく大学の研究者になりたいくて、理学部数学科を目指して勉強に励んだ。

しかし、現実はきびしく、希望通りには行かなかった。そこで数学の次に興味があった建築学科を目指し、幸い福井大学の建築学科に合格する。正直言って、入学時点では数学科に行けなかった未練たっぷりの状況だった。

大学時代に芽生えた古建築への興味

昭和48年に福井大学に入学、最初の1～2年は受験勉強からの開放、そしてなかなか建築の世界に馴染めなかったことから、研究にも身が入らなかった。今の仕事に関わる日本建築史の講義は「可」という始末。

はっきり時期は覚えていないが、2年あるいは3年の時、建築学科の先輩から今庄にある板取地区の集落調査の手伝いをしないかというお誘いを受ける。その

後、若狭の熊川地区(鯖街道の宿場町)の調査でも誘われ、調査に参加。当時は右も左もわからない状態でおそらく先輩方に相当迷惑をかけたことと思う。

後で知ったのだが、昭和50年に文化財保護法が改正され、これまでは国宝重要文化財など建物単体の保存という概念しかなかったが、目まぐるしく変わる社会の中で相当の勢いで消滅し続ける伝統的な集落町並みを保存する仕組みが出来た。板取や熊川の調査はその流れによるものであった。



熊川宿のまちなみ

この調査で古建築に直接触れ、日本の木造建築の素晴らしさ、奥深さを感じ始めるようになった。

渡辺貞清先生の研究室に入り、卒業論文は日本建築史をテーマとした。先生はバロック建築の大家であり、日本の建築が専門ではなかったが、建物に対する姿勢や歴史観などにおいて大いに刺激を受け、大いに教わった。

欲が出てきた。もっと日本建築の歴史を追究したい。渡辺先生に相談すると、書院造、城郭建築の大家である東京工業大学の平井聖先生を紹介される。そして、その研究室には福井大学の先輩である吉田純一

氏（現在福井工業大学教授）がいるので相談にのってくれるだろうとのこと。即、東京工業大学大学院に進むことを決断。若気の至りで、家族の反対を押し切った進学であった。

福井大学時代は集落町並みの調査に参加できたが、東工大では栃木県と群馬県の近世社寺建築の調査に参加できた。昭和50年代になると近世に建てられた社寺建築が鉄筋コンクリート造の建物に建て替えられる事例が増え始めた。これに危惧した文化庁が全国的な近世社寺建築の悉皆調査を始める。その一環で東工大の平井研究室が栃木県と群馬県の調査を担当することになったのである。

福井大学で農家や町屋の住宅建築、東工大で社寺建築の調査を体験、これによって古建築に対する興味はどんどん膨らんでいった。

大学院の二年生になる頃には、就職は文化財の世界と決めていた。したがって就活らしいことはせずに文化財を専門に扱う、とある財団に入ることを目指すようになった。

最初の就職先：

(財)文化財建造物保存技術協会

昭和54年4月1日、(財)文化財建造物保存技術協会の技術職員として採用された。

建築工事には施工を担当するゼネコン（工務店）と設計監理を行う設計事務所の二者が存在する。私が所属した文化財建造物保存技術協会は、後者の設計監理を行うところ。ただ、一般の新築工事の設計事務所とは異なり、すでに存在する文化財の修理の設計監理である。そのためには常日頃から古建築の勉強を行う必要がある。文化財の修理は人間の治療と似ているところがある。具合が悪くなった人を治療する場合、医者は当然人の体のこと、病気のことを熟知している必要がある。加えて事前の検査、問診等により病状を把握し、どのような治療をすべきか検討する。文化財の技師は医者に相当し、古建築のことを熟知するとともに修理対象の建物の状況を徹底した調査によって捉え、それをもとに修理の設計を行う。

最初に就いた現場は静岡市にある静岡浅間神社。昭和54年4月から昭和59年9月までの期間。江戸後期から末期にかけて建てられた建物が多数残るところで、修理工事の内容は漆、塗装などである。

建築当時の建築仕様書、積算書などの文書が多数残

されており、学生時代はまったくダメだった文書を必至で読んだ。筆で書かれた達筆な文書は最初まったく読めなかったが、静岡市が主催する近世文書解読勉強会等にも通い、ある程度読めるようになった。

この現場では古びてあちこち破損が進んでいる建物が伝統技術を持つ職人の手にかかるとこのようによみがえるのだということ。建物の素晴らしさとともに職人の能力に驚いた。



静岡浅間神社

私の仕事に対する姿勢に大きな影響を与えた師との出会い

次の現場は、三重県津市にある浄土真宗高田派本山専修寺の如来堂という建物。二重屋根の巨大な建物。修理内容は屋根葺替や木部の腐朽箇所等の補修。ちなみに母の実家はこのお寺の門徒で、祖父母等のお骨もここに納めてある。



専修寺 如来堂

この現場責任者が領家堯之氏。彼には技術的なこともさることながら、その後の私の文化財の世界での生き方のヒントをいただいた。今の私があるのはこの方のおかげと思っている。

当時若かった私は、建物に触りたくて（調査をしたくて）仕方がなかった。でも彼はそれをさせてくれなかった。最初の半年ほどは二人で県内の国分寺跡など

の古代の遺跡巡り。そのころは、建物を修理する場合、建物だけを見てはダメ、建物が置かれている環境、立地条件等を十分把握しなければならないということだった。

専修寺は15世紀に本山が栃木の高田から現在地に移った。この時期は立地条件の良いところは既に利用されており、残っているのは条件の悪いところばかり。実際、専修寺の敷地は地下水位も高く、建築敷地としては決して良くなかった。今回の修理対象の建物も柱の不同沈下（地盤の影響により発生する傷み）が発生していた。国分寺跡などを見た目で、専修寺の現場を眺めると一目瞭然、その立地条件の厳しさを痛感した。このことを踏まえて建物の修理方針をたてるべきだと言うことを教えてくれたのだ。熟練した医者が見病を診るとき、病気の箇所だけに注目するだけでなく、生活環境、食事習慣などを聞き出して処方箋を書くのと同じだ。

領家さんにはその他にも多くを教わった。要は視野を広くし、総合的に判断し、物事に当たりなさいということ。昼は仕事の虫だったが、夜は大酒飲みに変身。よく二人で飲んだ。朝まで飲み明かしたことも何度か。良い意味で、金を使うことに躊躇しなくなったのも領家さんとの付き合いから。浪費するという意味ではなく、例えば後輩と飲むときは大判振る舞いしろと言うこと。

領家さんとはわずか1年で異動の辞令。だが、私の人生のターニングポイントとなった一年であった。この異動の辞令は正確に言えば文化庁採用辞令。現場での仕事の終わりでもあった。

第二の就職先 文化庁

昭和59年11月1日、文化庁文化財部建造物課の文部技官に採用された。文化庁は日本の文化、文化財を担当する役所である。その中で文化財を担当する部署が文化財部、さらにその中で文化財建造物、伝統的建造物群保存地区（若狭の熊川宿のような伝統的な集落や町並み）等の保存・活用するところが建造物課である。仕事の内容は行政。これまでの現場との仕事とは全く異なる。

最初の勤務先では5年半ほどお世話になったが、静岡と三重の現場の二箇所。これに対して文化庁は仕事の対象が47都道府県に所在する文化財。仕事の内容も霞ヶ関の机に座っているだけでなく、全国の文化財

の修理等の現場に行き、技術指導等を行ったので、とにかく全国の文化財を見て回った。国指定の文化財は日本を代表するものなので、質も高く、多くの文化財を見ることが出来たことは私にとって大きな、大きな財産となった。47全ての都道府県を回り、二百棟を超える国宝はすべて見る事ができた。当然であるが、建物を観察する目は領家さんから教わった目であり、この目がなければ身につける内容は全く異なっただろう。

現場の多くは修理現場だったので、普段は見る事が出来ない建物の細部まで見る事ができた。また、大工等の職人などとも話が出来て、技術的なことまでいへん勉強になった。

文化庁の付属機関である 奈良国立文化財研究所に異動

平成6年10月1日、奈良国立文化財研究所に異動した。文化庁は東京と奈良に2つの研究所を持っていた。東京は動産等文化財保存のための研究機関、奈良は不動産文化財保存のための研究機関。動産等とは美術工芸品などの動産と無形文化財。不動産とは建造物と史跡名勝天然記念物等である。

平城宮大極殿復原事業を担当

私が赴任した時、奈良国立文化財研究所が所管する特別史跡平城宮跡で復原整備事業が始まったところ。前年の平成5年には朱雀門の復原工事が始まった。私が奈良に行ったのは、朱雀門の後に計画されている平城宮の中心建物である大極殿の復原案をまとめるため。奈良国立文化財研究所には建築が専門のスタッフが数名いたが、皆優秀ではあるが大学から直接入った人ばかりで、建物の詳細にまで踏み込んだ仕事の経験がな



平城宮大極殿

い。そこで私が選ばれたとのことだった。

大極殿の復原については既に復原原案が出来上がっており、着任時は多少の調整で済むと思っていたが、大変甘かった。大極殿復原事業は国家プロジェクトで、巨額の税金が投じられるもので、文化庁と奈良国立文化財研究所が復原するのであるから、当然学術的根拠に基づくものでないといけない。復原図とともにその根拠となる資料を揃え、国の文化審議会で許可をいただける資料をまとめ上げないといけない。新築ならある意味好き勝手にデザインすればよいが、図面の線一本一本に学術的な意味を持たせないといけない。

遺跡における建物復原の場合の根拠となるのは柱が立っていた礎石、あるいはそれが据えてあった痕跡、土中から発掘された瓦などの出土品等。大極殿の場合は得られた資料は、柱の位置、建物が建っていた壇の範囲、そこに登る階段の痕跡、そして瓦が出土したから瓦葺きであったこと。たったこれだけ。木材部分に関するものは一切無い。このような状況下で復原案をまとめないといけない。

奈良に行くまで私の古代建築研究に対する認識は、明治中頃から100年近く、名立たる大学の先生方が多くの論文を書かれており、すでに研究し尽くされているだろう、というもの。従って先生方の論文を参考にすれば復原案もまとまるだろう。しかし、先生方の論文を読んで愕然とした。それぞれの論文の内容は、当然私のようなものは足元にも及ばないものであったが、これらの論文をいくら読んでも、極端なことを言えば復原図の線一本も引けないものだった。つまり、設計に役立つものがほとんどなかった。これまでの論文は法隆寺金堂、薬師寺東塔、唐招提寺金堂などの名建築を芸術作品として観察し、様式論を展開するなどが主流で、当時の棟梁はどのようなことを考えてこのような構造にしたのか、どうしてこのような材料を使ったのか、等々の仕事に関する研究が無いのである。これでは設計には活かされない。

当時、特に資料的に乏しい古代遺跡の復原において、建物のこの部分は現存するAという建物の部分を採用、この部分はBという建物から採用、というようにして全体をまとめる復原手法があった。これを「パッチワーク的復原」と批判されることがよくあった。正直言って、私が就任時受け取った復原原案はこのように言われても仕方のないものであった。柱の太さは東大寺の転害門、柱上の組物という部分は時代的に同じである薬師寺東塔、内部の構造は唐招提寺金堂、といっ

たように。古代遺跡を担当した人と同様、私はこれを批判するつもりはない。批判する人は古代遺跡復原の実情を知らない評論家的な人たち。

私としては発掘調査で得られた資料がいくら乏しいからといって、パッチワーク的復原は避けたいと思った。ではどうしたか。この時私を助けてくれたのは、現場時代の領家さんの教え、つまり建物だけでなく環境なり、その他周辺のものを含めた広い視野で建物を捉えようとする姿勢、そして文化庁時代に全国各地の一級の建物、それも細部までも見てきた経験であった。まずは奈良時代の建物の調査に明け暮れた。法隆寺、薬師寺、唐招提寺、東大寺等々。古代遺跡の発掘現場にも足を運んだ。さらに出来るだけ多くの図面を描いた。図面を描くことによって発見することが多いからである。そのため、CADも憶えた。



大極殿 復原工事

このような生活を7年半過ごした。おかげさまで復原案をまとめ、国の審議会の審査も可を得ることができた。奈良に来るまでは実在する建物の修理を担当していたため、新築の設計士さんのような設計する姿勢が乏しかった。しかし、奈良では何も無いところから設計をするという姿勢で仕事を行なった。建物を観察するときも常に当時の棟梁はどのような考えで、どのような技術を使って建てたのか、といった視点で建物を観察する癖がついた。これによってこれまでまったく気が付かなかったことにも気が付き始めた。

奈良での研究面の成果は、古代建築に関する多くの論文、そして『伝統木造建築を読み解く』という私の著書。

- ①古代において調達できた木材の最長は約10mで、これが建物の規模や組物形式に影響を与えた
- ②法隆寺の飛鳥様式の雲肘木等は、軒が地垂木一段であることが要因である
- ③法隆寺は、校倉建築の考えで設計されている
- ④古代寺院の金堂の屋根寄棟造と柱配置には、密接な

関係がある
等を明らかにした。

現場では大極殿の復原工事に着手、これで私の仕事も終わり。文化庁への異動辞令が出る。

再び文化庁へ

平成14年4月1日に再び文化庁に戻った。今回は主任文化財調査官という管理職。担当は国宝重要文化財建造物の修理。文化財の修理における技術的指導や修理費用に対する補助金事務を行う部署である。ここで大いに役に立ったのは、領家さんの教え、そして奈良で身につけた設計者として建物を観察する姿勢であった。

また、これまで日本を代表する建物の修理、大極殿という奈良時代の政庁の復原などを担当出来て、度胸も付いてきた。在任期間中に近年竣工した姫路城大天守、現在実施中の瑞巖寺本堂、出雲大社本殿ほか、薬師寺東塔、清水寺本堂他等の事業を立ち上げることができた。

平成23年3月11日発生した東日本大震災、文化財も大きな被害を受けた。文化財修理を担当していた私は、まず現地に部下を派遣するなど被害状況の把握に務めた。地震発生から2週間後、地震被害の復旧のことしか頭にない私に突然の異動内示。4月1日から全国の文化財建造物の保存と活用を総括する参事官ポストに就くことになった。

身分不相応なポストでしばらくは何をやっているのかわからない状態。その時、文化財建造物保存技術協会の先輩（その方は協会の幹部になっていた）から、「文化庁の職員は皆とても優秀。だから仕事を一人でやろうと思うな。みんなにやらせるのが仕事とわきまえよ。」というアドバイスをいただく。心が少し楽になった。

おかげさまで4年後平成27年3月31日、大過無く定年退職の日を迎えた。参事官在任中、部下の努力で京都の本願寺御影堂、富岡製糸場、松江城天守など6棟を重要文化財から国宝に格上げすることができた。富岡製糸場は世界遺産にもなった。

最後の年の1月には、昭和30年から毎年実施している文化財防火デーのメイン会場へ文化庁長官に随行して出張した。メイン会場は最近防災事業が完了したところから選ばれる。この年は福井県の丸岡城天守。定年最後の年にふるさと福井の現場に行くことができ

たこと、ただただ神に感謝。

最後の出張は3月末の姫路城大天守の竣工式。自分で立ち上げた事業の竣工式に参事官として列席できた。この上ない幸せな最後の出張だった。

退職後（平成27年4月以降）

奈良文化財研究所で火のついた古代建築研究への思いも、文化庁時代は通常業務でなかなか思うようには進まなかった。退職を機に古代建築研究に没頭しようと決意した。そこで、新たな住まいはふるさと福井に近く、古代建築が多い奈良との中間、彦根を選んだ。家は彦根城のすぐ南に位置し、毎朝の散歩は彦根城。松江城、丸岡城、姫路城、そして彦根城、お城に縁があるようだ。

そういう矢先、5月にふるさと福井県から福井県文化財調査特別顧問という役をいただく。その最初の仕事が丸岡城天守を重要文化財から国宝へ格上げ。またまたお城。丸岡城天守のある坂井市は早速、国宝格上げに向かって調査委員会を立ち上げた。そして11月に第1回の会議開かれ、委員長が決まったが、何と福井大学出身者で東京工業大学時代お世話になった吉田純一氏。さらに構造の専門家として地元出身の木林長仁氏が委員となったが、この方には奈良で大極殿復原事業を担当しているときに構造面で助けていただいた。

天守関係の研究論文を読んだが、古代建築同様、芸術作品を鑑賞する立場での研究だった。設計者的な姿勢での研究はほとんど無い。今後こちらの視点でも研究を深めて、何とか国宝格上げに持っていきたいと思っている。



丸岡城

まだまだやりたいことが尽きない。これまでの経験を踏まえ、先輩方の教えを活かして、建築歴史の研究、文化財保存のお手伝いを続けていきたいと思っている。